

聖書:ホセア書3章1～5節

説教:私も、あなたにとどまろう

はじめに

続けてホセア書を見てまいります。北イスラエルが聖書の神を捨ててバアルという神々を拝んでいた時代に、ホセアは預言者として召され、北イスラエルに対するさばきと救いのみことばを語りました。ただ単に語っただけではありません。これから預言者として働くという最初の場面で、神はホセアに対して「姦淫の女と結婚しなさい」と命じました。ホセアはそうなって欲しくないと願っていたかもしれませんが、妻ゴメルは神が告げられたとおりに姦淫の罪を犯してしてしまいます。そのときホセアがどう思ったのかは、聖書に何も書かれていません。なぜ神はこのようなことをされたのでしょうか。ここにどのような神のみこころがあるのかを考えてまいります。

1 再び行って

1) 買い取る

おそらくゴメルは家を飛び出してホセア以外の男性と暮らしていたでしょう。レビ記には、姦淫した男も女も必ず殺されなければならないとあります。ホセアの時代には、厳格に行われていなかったのかもしれませんが、たいへんなスキャンダルには変わりありません。ふつうなら妻の不祥事により、ホセアは預言者を辞めなければならないということもあり得た。しかしこの場合、ゴメルが姦淫の罪を犯すことは最初から織り込み済みですから、そういうことにはなりません。

ここで神は、ホセアに次のように命じています。1節前半。「再び行って、主に愛されているながら姦通している女を愛しなさい。」みなさんはどうでしょうか。勝手なことをして裏切って出て行った妻を、なお愛することができるのでしょうか。悪いのは全部妻の方です。これだけでもはらわたが煮えくりかえりそうになるのに、「姦通している妻を愛しなさい」と言われました。

妻を愛していることを示すために、ホセアは二つの行動を起こさなければならませんでした。その一つ目。ホセアは、銀十五シケル、大麦一ホメル、大麦一テレクを出して、妻を買い戻します。計算してみると、現在のお金に換算するなら十万円くらいようです。小林先生が言われるように、ホセアは全財産をはたいて支払ったのかもしれませんが。いずれにせよ、裏切った妻を取り戻すため

に、ホセアは身銭を切らなければなりませんでした。これが一つ目です。

2) 私のところにとどまりなさい

ホセアがしたことの一つ目。3節。「これから長く、私のところにとどまりなさい。もう姦淫をしたり、ほかの男と通じたりしてはいけません。私も、あなたにとどまろう。」

ホセアの場合と反対に、夫が妻を裏切るというケースも世間にはたくさんあって、妻の方からこんなことを言われる。「あなたは私の夫ではありません。あなたが働いているうちは我慢するけれど、あなたが退職したらもうものをもらって離婚します。」そのような夫婦が珍しくありません。ところがホセアの場合はまったく正反対です。「まさかこんな夫がいるとは信じられない。ホセアはよほどのお人好しなのか、少し頭がどうかしているのではないか。」そんな感想が漏れてきそうです。

2 ホセアの葛藤

このとき、ホセアがどんな気持ちでこのようなことをしたのかは何も書かれていません。ホセアは当初、家族も罪から離れて聖い生活をし、常に人々の模範となる。それが預言者の努めであると信じていたと思うのです。ところが、神から姦淫の女ゴメルを妻に迎えなさいと言われ、生まれてくる三人の子どもには、ことごとくイスラエルの罪を思い起こさせる名前をつけなさいと命じられる。そして今日の箇所では、他の男のもとに走ったゴメルを金を払って連れ戻し、姦通している女を愛しなさいとまで言われる。ホセアは、「なぜですか。どうして私がそんなことをしなければならないのですか。」そんなふうに叫びたくなったのではないかと想像します。なぜ神はホセアにこのようなことを命じたのでしょうか。

3 神

1) 主が愛しておられるように

そのことを考えるヒントは次のことばです。1節後半。「ちょうど、ほかの神々の方を向いて干しぶどうの菓子を楽しんでいるイスラエルの子らを、主が愛しているように。」主がイスラエルの子らを愛しておられるとあります。そのイスラエルの子らは、いま何をしているのでしょうか。「バアルの

神々の方を向いて干しぶどうの菓子を愛してい」ます。バアルの神々は、おいしいお菓子を食べさせてくれる。豪華で豊かな暮らしができる。そんな動機で、イスラエルの子らはバアルの神々を愛していました。そんなふうにして夫を裏切っていたのに、神はイスラエルの子らをなおも愛し続け、ひたすらに戻ってくるのを待っておられました。

何も言わず、じっと我慢して辛抱して待っていたのではありません。2章13節にこうありました。

「彼女がバアルの神々に仕えた日々のゆえに、わたしは彼女を罰する。彼女はバアルの神々に香をたき、耳輪や飾りを付けて愛人たちの後について行き、このわたしを忘れた。——主のことば。」

イスラエルがバアルのもとに走って行ったとき、厳しいさばきのことばを語り続けました。どうして厳しいことを語るのでしょうか。帰ってこなければひどいことになるという脅しでしょうか。いえ、決して脅しているのではない。

2) 終わりの日に

このことを立場を変えて、家を飛び出してほかの神々を慕い求めているイスラエルの子らの側から見てもみましょう。「戻りなさい」という呼びかけられて、どんなことを思うのでしょうか。「ここにはおいしい干しぶどうのお菓子がたくさんあるし、楽しい生活があるのにどうして戻る必要があるのか。」いまだけ見るならそのとおりです。

しかし主はこの先のことを見ておられます。4節にこうあります。「これは、イスラエルの子らが、これから長く、王もなく、首長もなく、いけにえも石の柱もないところに、エポデもテラフィムもないところにとどまるからだ。」北イスラエルは、ホセアのとときから数えて38年後にアッシリアに攻め滅ぼされ国を失い、人々は補囚となって外国に連れていかれるという大変な苦しみを通されていくことがわかっています。王もなく、首長もないとはそのことを指します。

「バアルのおかげで楽しく過ごしているから大丈夫。」今はそんなふうに気楽に言えるかもしれない。しかしこれから先はどうなのか。あなたがたはやがて国を失い、苦しみを味わうことになる。そのときどこに望みを持つのですか。バアルはあなたがたを守ってくれるのか。いやまったく役に立たない。そんなものを信じてはいけない。そうではなくて、あなたがたを救い出すと約束してくださる神を信じなさい。ひどいことが起こらないうちに、いまイスラエルの神のもとに帰りなさい。そのように呼びかけます。

3) あなたにとどまる

でも一度裏切った神のところへほんとうに戻れるのか。たとえ家に入れてくれたとしても、家庭内別居のように厳しい表情をした神が待っていて、冷たい戦争になるのではないのかと恐れます。神はホセアを通してなんと言われたか。3節。「これから長く、私のところにとどまりなさい。もう姦淫をしたり、ほかの男と通じたりしてはいけない。私も、あなたにとどまろう。」

どんなにひどいことをして神を裏切ったとしても、神のところに戻るなら神は私たちのところにとどまってくださる。決して見捨てることはないと言われます。

4) ホセアを通して現れてくるイエス・キリスト

夫を裏切って出て行った妻ゴメルを、ホセアはお金を出して妻を買い戻し、「私も、あなたにとどまろう」と語りました。なぜ神はホセアにそのようなことをさせたのでしょうか。二つの理由があります。一つ目。ホセアはただ語るだけではない、妻の裏切りとい苦しみを通して神の愛がどれほどに深く、罪を悔いて立ち戻る者に対してその罪を赦して下さる方であるのかを、身をもって学ぶ必要がありました。なぜなら、ホセアの先にイエス・キリストがおられるからです。イエス・キリストの姿が、ホセアを通して見えるようにされます。神を裏切り背いて出て行った私たちをもう一度神の家に招くために、神がどれほどつらい思いをされているのか、ホセアは苦しみを通して学んでいきます。

なぜホセアが苦しまなければならなかったのか。このことは二つ目の理由にも関連します。神は、たとえ神に背いた者であろうとも救いたいからです。ホセアが妻を買い戻し、優しい言葉で再び家に連れ帰ってきた。その姿から神がどれほどにイスラエルの子らを愛しているかを、ことばだけでなく、ホセアとゴメルという一つの夫婦を通して目に見えるようにしようとされた。これが神の救いのご計画でした。ホセアを通して、イエス・キリストの十字架が浮かび上がるようにしているのです。

神は私たちを救うためにこんなことまでされるのかと、驚くばかりです。しかし私たちは鈍感です。楽しく豊かに暮らせるなら、どんな神でも拝みますと言ってはばかりません。けれども、この先に何が待ち受けているのでしょうか。終わりの日がやって来ます。いつまでも気楽な暮らしが続くのではない。苦難の日がやって来ます。その日のことを思うなら、みな主に立ち戻るべきではないでしょ

うか。神が恐いから戻るではありません。やがての終わりの日、「主とそのすばらしさに（私たちは）おののく」のだと言われます。私たちが思い描いているものをはるかに超えて、神がすばらしいことを成し遂げてくださる。そのところに目を留めながらまた歩んでまいります。